

# 大学がいま社会に対してなすべきこと

東京外国語大学長 亀山郁夫

おはようございます、学長の亀山です。今日から12月に入りました。寒い中、多文化協働実践研究全国フォーラムの第1回の会合にお集まりくださりまして、誠にありがとうございます。

今やグローバル化と呼ばれる時代に入って、この時代がいてみれば非常に悲劇的な状況、二極化の状況を示していることは、たぶん皆さんもご存じの通りだと思います。この二極化の時代とは、ある意味で人類がその歴史のプロセスにおいて克服しなければならなかった弱肉強食の論理がそのまままかり通るような、そうした時代を言います。強い者は強く、弱い者は弱くという、悲しい状況が、今、我々の目の前に現出しているわけです。その中で最も大きな矛盾にさらされている存在が、ある意味で国と国との間、狭間に置かれた人々であろうかと考えるわけです。例えば、私たち日本に住んでいる数多くの在日外国人の方々が、そうした弱い立場に置かれているのです。

現在、グローバル化そして少子高齢化という大きなうねりの中で、日本は国家的なレベルでさまざまなプロジェクトを進行させていますが、その根幹にあるのは、いかにして産業大国としてのメンツを、これから遠い将来にわたって失わずに築いていくかということです。国家の目というのはおおむねそうしたプラグマティックな方向に向けられがちですが、しかしそれでも最近では、このグローバル化という状況の中で現出している、今、申し上げたような足元の国際化の問題に、目を向け始めたということができると思います。



亀山郁夫

東京外国語大学のグランドデザインが示す基本的な方向性とは、世界のさまざまな地域の言語、文化、社会の教育・研究であり、これらは本学にとって最も根幹部をなしています。その方向性がただ単にデザイン、お題目としてあるだけでなく、それをいかに現実化に向けて有効なものにするか、これが2007年9月に学長に就任した私が向かい合った最も大きな課題でした。そして本学に新たに誕生した多言語・多文化教育研究センターこそ、その中心的な役割を担うべき組織のひとつとして、私自身非常に大きく注目しているところです。

このセンターの中心とする事業は、先ほどイントロダクションのかたちで紹介されたビデオでもありましたように、教育、研究、社会連携というこの3つの柱から成っています。この3つの柱、ある意味ではこの3つの分野がバランスよく進展していくことを私は強く願っております。そして、現実に関わって、この配布資料を見ながら、そうしたあり得べき発展の道筋がしっかりと刻み込まれていることを確認し、意を強くした次第です。

多言語・多文化教育研究センターは、先ほども紹介がありましたように「多文化コミュニティ教育支援室」という、ある意味で小さなボランティア・プロジェクトから始まりました。このプロジェクトは、ポルトガル語文学・文化論を研究なさっている武田千香准教授の優れた発想力によって生まれたもので、その発展形態であるこの多言語・多文化教育研究センターが設置されて以降は、高橋正明教授の献身的なお仕事によって着実に根づいたといえましようか、ある意味でこのわずかな期間に飛躍的な発展を遂げた、と私は考えており、大いに感謝しているところです。

また、この度は元浜松市長である北脇保之氏を本学の教授としてお迎えすることができ、地域に密着しつつ、同時にグローバルな視野でこのセンターを展開させていく上で、貴重なステップをしるすことができたと考えております。

今回の全国フォーラムの開催には、さまざまな方々のご尽力、ご協力をいただいております。ここではいちいちその名を挙げることはいたしません、どうか今日と明日のこのフォーラムでの議論が、府中から全国へ、さらに日本全国から世界に広がっていくことを願ってやみません。この多言語・多文化教育研究センターの事業に対する私の個人的な思いにつきましては、この配布資料の第1ページに書きました（資料 p. 90 参照）。どうか後ほどお読みいただければ幸いです。

これをもちまして学長のあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。